

I 小学校英語活動 Q & A

Q 1 英語活動の教育課程上の位置付けやねらいはどのようになっていますか。

A 1 5・6年では、教科外取り扱いで必修となります。

ねらいは、次の2点に集約されます。

- ① コミュニケーションに対する関心・意欲・態度の育成
- ② 言語や文化に対する理解と異文化尊重の態度の育成

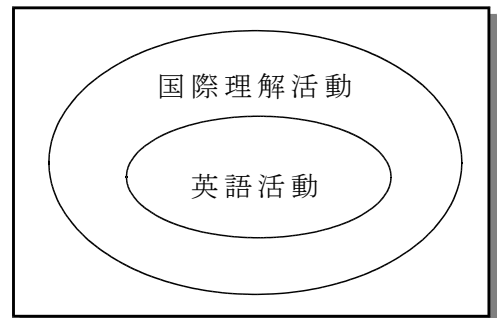
平成10年に改訂された現在の学習指導要領では、英語活動は、総合的な学習の時間に行う国際理解教育の一環として位置付けられています。その中で、「児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど、小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること」が求められています。

平成20年1月17日に示された『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)』(以下『中教審答申』とする)では、次のような位置付けになるとされています。

- ① 小学校5・6年生において、週に1時間の外国語活動を必修とする。
- ② 目標や内容を各学校で定める総合的な学習の時間とは趣旨・性格が異なることから、総合的な学習の時間とは別に時数を確保し、教科としては位置付けない。
- ③ 教科のような数値による評価は行わない。

また、文部科学省は、平成19年度に、小学校英語活動を推進するための新規事業として、『小学校における英語活動等国際理解活動推進プラン』を立ち上げました。

この事業名から言えることは、英語活動(外国語活動)は国際理解活動の一領域であるということです。(右図参照)



次に、英語活動のねらいについて見てみましょう。平成13年4月に文部科学省から出された『小学校英語活動実践の手引』(以下、『手引』とする)に次のような記述があります。

第1章2 (1) 小学校における「英語活動」のねらい

児童期は、新たな事象に関する興味・関心が強く、言語をはじめとして、異文化に関しても自然に受け入れられる時期にある。このような時期に英語に触れることは、コミュニケーション能力を育てる上でも、国際理解を深める上でも大変重要な体験になる。「英語活動」そのものが異文化に触れる体験となり、さらに、外国の人や文化にかかわろうとするときの手段として、英語を活用しようとする態度を育成することにもつながる。すなわち、言語習得を主な目的とするのではなく、興味・関心や意欲の育成をねらうことが重要である。(ゴシック体への変換は本研究会による)

このことから、コミュニケーションへの関心・意欲を育てることがねらいであるということが分かります。

また、平成18年3月に出された『中教審外国語専門部会会議報告』では、「小学校段階の英語教育の目標」について、次のように述べられています。

- 小学校段階の英語教育の目標については、
- ① 小学校段階では、音声やリズムを柔軟に受け止めるのに適していることなどから、音声を中心とした英語のコミュニケーション活動や、ALT(外国語指導助手)を中心とした外国人との交流を通して、音声、会話技術、文法などのスキル面を中心に英語力の向上を図ることを重視する考え方(英語のスキルをより重視する考え方)
 - ② 小学校段階では、言語や文化に対する関心や意欲を高めるのに適していることなどから、英語を使った活動を通して、国語や我が国の文化を含め、言語や文化に対する理解を深めるとともに、ALT や留学生等の外国人との交流を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、国際理解を深めることを重視する考え方(国際コミュニケーションをより重視する考え方)
- が考えられる。
- (中略)
- 外国語専門部会としては、こうしたことを総合的に勘案すると、中学校での英語教育を見通して、何のために英語を学ぶのかという動機付けを重視する、言語やコミュニケーションに対する理解を深めることで国語力の育成にも寄与するとの観点から、②の考え方を基本とすることが適当であると考えられる。
- そして、この場合においても、①の側面について、小学生の柔軟な適応力を生かして、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、聞く力を育てることなどは、教育内容として適当と考えられる。

さらに、前出の『中教審答申』では、「中学校段階の文法等の英語教育を前倒しするのではなく、**国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標として、外国語活動を行うことが適当と考えられる**」とされており、現在の英語活動のねらいと大きく異なるものにはならないと予想されます。

以上のことから、英語活動(外国語活動)のねらいは、次の2点に集約されます。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① コミュニケーションに対する関心と意欲、積極的な態度を育成すること② 言語や文化に対する理解を深め、異文化尊重の態度を育成すること |
|---|

英語活動は、「**英語によるコミュニケーション活動**」を短くした言葉だと言われています。英語の表現や文法などを学習するための時間ではなく、国際理解活動の一環として、体験的なコミュニケーション活動を行う時間だということです。

今後の予定としては、平成19年度末に英語活動(外国語活動)を必修とした新学習指導要領が示され、平成20年度を周知期間、平成21・22年度を移行期間とし、平成23年度に新教育課程の完全実施を迎えると考えられます。これまでほとんど英語活動の経験がない先生方は、平成20年度からいきなり年間35時間の授業実践を始めるのではなく、年間20時間程度を目標に、少しずつ実践を重ねていけばいいのではないのでしょうか。

英語のことわざにも、**"Slow and steady wins the race."**(ゆっくり着実に取り組む者が勝者となる)というのがあります。焦らずに、3年間を掛けて、少しずつ35時間に近づくように実践を進めることが大切だと思います。

Q 2 英語活動でのコミュニケーションをどうとらえればよいでしょうか。

A 2 言葉のやり取りだけがコミュニケーションではないということです。

小泉清裕氏は、本教育センターの「平成19年度小学校英語活動講座」の講演で、次のような例を紹介されました。

「ある学校の公開授業でのことです。6年生のクラスで授業が始まり、担任の先生が"Good morning. How are you?"といういつものあいさつをされました。そのあとで、先生は一番前の男の子に、"What's your name?"と尋ねられたのです。先生は、"My name is ~."という返事が返ってくると期待されたのですが、その男の子『ぼくの名前を知らないなんて信じられない』とそっぽを向いてしまったのです。担任の先生が『英語での言葉のやり取り』をコミュニケーションととらえたのに対し、男の子は『意味やメッセージのやり取り』をコミュニケーションととらえ、そのズレがそっぽを向くという態度に表れたのでしょう。」

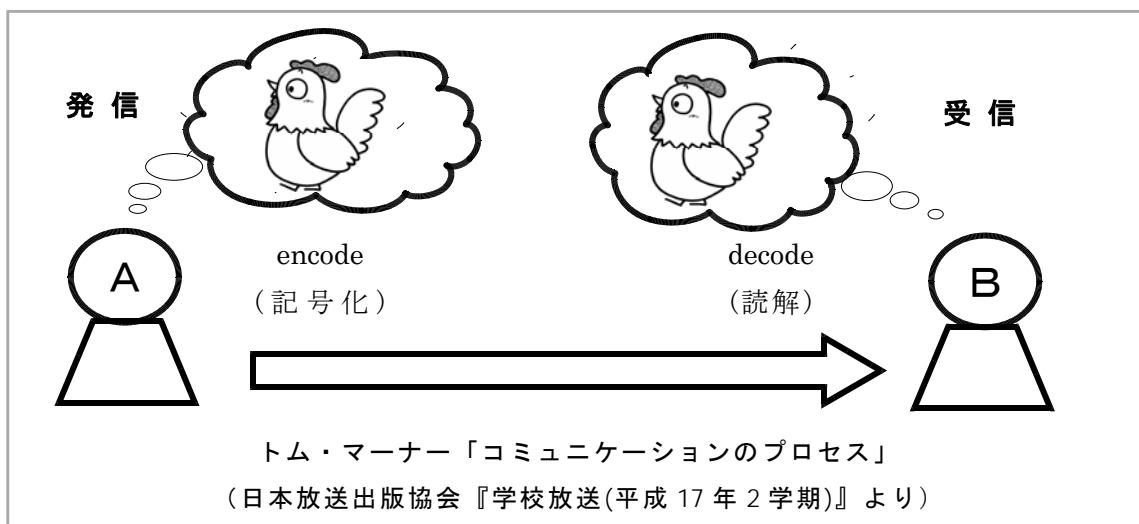
教室で「英語を指導する」となったときに、「英語でのやり取り」を繰り返し練習させる場合がありますが、意味のやり取りを重視したコミュニケーションには、**"information gap"**(情報量の差)が必要です。相手の状態がよく分からないとかもっと知りたいという、「やり取りの必然性」を意識した活動が重要になってくるのです。

また、明治大学教授の齋藤孝氏は、著書『コミュニケーション力』の中で、コミュニケーションを「**意味や感情のやり取り**」と定義しています。前述の「意味のやり取り」に加えて、「相手のことに関心がある」とか「一緒に活動して楽しい」という「感情のやり取り」が学級の中に必要です。

次に、「受信と発信」という視点でコミュニケーションを見てみます。

コミュニケーションは、相手とのやり取りの中で行われます。相手の言うことを理解し、それに対して言葉を返すということの繰り返しです。(下図参照)

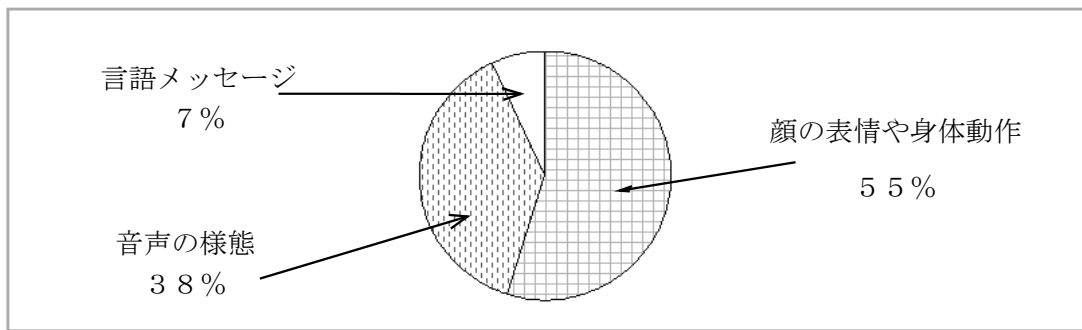
これを英語という異言語でのやり取りで考えると、相手が言ったことをトータルでとらえ、そのメッセージを「何となく理解し(推測し)」、様々な方法を駆使して「反応する」というプロセスになります。



さらに、「言語・非言語」という分け方もできます。

コミュニケーションをテーマにした研修会などで、「メラビアンの法則」が取り上げられることがしばしばあります。

「人と人とのコミュニケーションにおいては、言語メッセージが7%、非言語メッセージが93%の役割を果たしている」、「非言語のうち、身振り手振りなど視覚的なものが55%、声の大きさや調子など音声の様態が38%」というような説明をされる講師も多いようです。(右図参照)



そこから、コミュニケーション

に必要な3Vとして"Verbal(言語)", "Visual(視覚)", "Vocal(音声)"などの説明も聞かれます。

インターネット上の百科事典「ウィキペディア」によると、メラビアンの法則とは、アメリカの心理学者アルバート・メラビアンが1971年に提唱した法則です。彼が行った実験は、声の調子をいろいろ変えながら、"maybe" (かもしれない) などの言葉を言ってもらい、被験者がその音だけ聞いて、どれくらい「そうかもしれない」と感じたかを判断するものでした。力強い口調の場合は、普通の口調よりも、「そうかもしれない」と感じたということが立証できた実験だと言われています。

この内容が次第に一人歩きをし、言語メッセージは7%しか伝わらないが、非言語メッセージは93%伝わるといったような意味合いに取られるようになってきました。

確かに言語メッセージが7%しか役割がないということはありませんが、メラビアンの法則はこのように若干曲解されている向きがあります。しかし、非言語コミュニケーションを否定するものでもないでしょう。

小学校の教師でも、「ALT と直接顔を合わせると英語での打ち合わせも何とかできるんだけど、電話での打ち合わせは難しい」と言う人は多いようです。このことから、英語がままならないときには、視覚的な情報に頼っているということが分かります。

非言語メッセージの要素はジェスチャーだけではなく、右の表のように様々なものがあるとされています。

歩き方、服装、香水の匂いでさえも、人となりが出てくることとなります。

非言語コミュニケーションの要素

- 1 人体
- 2 ジェスチャー (動作)
- 3 顔の表情
- 4 アイコンタクト
- 5 姿勢 (ポーズ)
- 6 歩行 (歩調)
- 7 その場の雰囲気
- 8 音声
- 9 身体的接触
- 10 香り, 匂い
- 11 色彩
- 12 服装
- 13 装飾品
- 14 化粧
- 15 髪型
- 16 空間
- 17 時間
- 18 沈黙

異文化間コミュニケーション入門

鍋倉 健悦 (1997)

以上のようなことから、英語でのやり取りだけを英語活動でのコミュニケーションととらえるのではなく、意味や感情のやり取り、受信と発信、言語・非言語メッセージの活用とコミュニケーションを広くとらえ、単なる英単語や英語表現の練習だけにとどまらない活動を創造することが重要になっていきます。

Q3 コミュニケーションに対する関心と意欲、積極的な態度とは、どのような児童の姿としてイメージすればよいのでしょうか。

A3 「方略的能力」を駆使しながら、何とか相手のことを理解しよう、何とか自分の気持ちを伝えようとする姿です。

コミュニケーションに対する関心・意欲・態度を一言で言えば、「異言語や異文化をもつ人に接したときに、その人とのかかわりを拒否したりあきらめたりするのではなく、相手に対する関心を持ち、何とかしてその人にかかわろうとする意欲と態度」ということになります。

直山木綿子氏は、『小学校での英語教育は必要か』という本の中で、次のように述べています。「言語習得において、8歳ごろには音声によるコミュニケーション能力はほぼ完成すると言われていました。

(中略)ところが、この時期に、あえて子どもたちにとって未知の言語の網をかぶせることにより、子どもたちは母語でコミュニケーションをとるときとは違い、その言語により注意を向け、努力、工夫をしないと、相手の話していることを理解したり、自分の思いや考えを相手に伝えたりできない状況に置かれることになります。」

子どもたちは、英語のインプットが十分な状態ではありませんから、言語メッセージ以外の情報(話者のジェスチャーや表情の他、絵カード、実物などまで含めた視覚的な情報)まで含めて全体的に受け止め、相手の言っていることを何となくでも理解しようと努力します。また、発信する際も、身振り手振りを交えて、一生懸命伝えようと努力しなければなりません。このような体験を繰り返すことにより、相手とかかわろうとする意欲やコミュニケーションへの望ましい態度が身に付くと考えられます。

「外国語で求められるコミュニケーション能力」のうちの1つとして、「方略的能力(Strategic Competence)」というものがあります(Canale & Swain)。例えば、コミュニケーションがままならない外国に行ったときは、日本にいるとき以上にジェスチャーが大きくなったり、絵を描いて欲しいものを求めたりということは、多くの人が経験していることでしょう。このように、言語メッセージ以外の手段も利用して、「何とかしてコミュニケーションを図ることができる力」が「方略的能力」ということです。

ですから、授業の中では、ALTや担任が英語で何と言っているか分からないときに、「分からなかったので、もう1回言ってください」ということを伝えることも方略的能力としては重要です。教師も日本語訳を与えるのではなく、「方略的能力」を発揮して、言語メッセージ以外の方法を更に駆使して何とか伝えようとする姿勢が必要になってきます。「分からない」という状態になったときに、教師の日本語による説明が聞こえてくると、子どもたちはコミュニケーションを図る努力をする必要がなくなってしまう。よく、「担任は逐一日本語に訳してはいけない」と言われるのも、このような理由によります。

担任や外国人ゲスト(ALTなど)との直接コミュニケーションを取る中で、この「方略的能力」を育てることは、コミュニケーション不足と言われていた現代だからこそ必要になってくるものだと考えられます。

Q 4 小学生段階での異文化・自文化に対する理解と、異文化尊重の態度とはどのようなものでしょうか。また、指導上のポイントがあれば教えてください。

A 4 自分と異なる考え方、価値観に出会ったときに、それを排除するのではなく、受け入れ、理解しようとする態度を養うこと、そして異文化と比較することで自分の文化(自文化)を見つめ直すことだと考えます。

異文化理解のねらいは、自分と異なる考え方、価値観に出会ったときに、それを排除するのではなく、受け入れ、理解しようとする態度を養うこと、そして異文化と比較することで自分の文化(自文化)を見つめ直すことだと考えます。

「異文化」「自文化」の関係は、「他者」と「自分」の関係に似ています。自分と異なる他者と交わる中で、様々な価値観に触れたり、ものの見方・考え方に気付いたりします。また、他者とのかかわりの中で「自分とはどういう人間か」という「メタ認知」を育てることもできます。異文化理解も同じで、今までとは異なる伝統や文化に触れることで、多様な考え方を学ぶことができますし、それと比較することで自分がもっていた文化(自文化)を再認識することができるのです。

市川力氏は、著書『英語を子どもに教えるな』の中で、国際感覚がある人というのを次のように定義しています。

「国際感覚とは、自分と相手とを相対的に見つめることで初めて気付く共通点と相違点とをきちんと受け止める感覚であろう。自分の文化にもそして相手の文化にも、ともに良い部分と悪い部分があることを理解し、それを受け入れて、自らの世界観を広げることができる感覚を身に付けた人を国際感覚がある人と呼ぶことができる。」

これを英語活動に当てはめてみると、異文化に触れて、自分(たち)とは「違う何か」に気付き、では「自分(たち)はどうなんだろう」と自文化を振り返る、そして、それぞれにいい点もあれば悪い点もあると、両者を客観的に見ることができる人を育てることが国際理解活動のねらいであると言えます。

そのためにも、「異文化理解」という言葉にある「異」の部分だけを強調するのはやや問題があります。例えば、アメリカ人とかアメリカという国について触れたときに、肌の色、髪の毛の色、目の色などの外見的な違い、ジェスチャーや表情の豊かさなどパフォーマンスの違い、そして、食べ物の好みや生活習慣の違いなど、その異なる点ばかりに目を向けさせる授業を見掛けます。

その結果、子どもたちは、「日本人とアメリカ人って違うところが多い」という感想ばかりを残します。金子みすずではありませんが、その違いを「みんな違ってみんないい」と感じればまだしも、中には「私たちとは違った人」と感じる子どもが出てくるのは問題です。

「異文化の中の異質性」と同時に、「異文化の中の同質性」に気付かせるということも重要です。つまり、「外見や文化、言語が違うけれど、ぼくたちと同じように家族や友達を愛し、泣いたり笑ったりしながら生活しているんだ」というところに気付かせるということです。その気付きは、「いろいろ違う点もあるけど、同じ点も多い。結局は同じ人間なんだね」というところに帰結するものになります。

また、様々な学校で異文化理解をテーマとした授業を参観して感じることは、外国の文化に触れさせることが異文化理解であるという先入観があるのではないかということです。一般的に、「異文化」＝

「異国文化」であり、「異国文化」との比較対象として「自国文化」、すなわち日本文化があると考えられているのではないのでしょうか。

しかし、同じ日本の中でも九州と北海道では気候の違いからくる生活習慣の違いがあります。また、同じ日本語を話しながらも方言という言葉の違いがあり、同じ国の中でも異文化というものは存在します。さらに、同じ地域に住んでいたとしても、若者とお年寄り、健常者とハンディキャップをもつ人では生活様式や価値観、ものの考え方といった広い意味での文化が異なる場合も多いと思われます。その異なる文化をもった人々を理解し、大事にしようという気持ちを育てることが異文化理解の本質的なねらいであり、それは福祉教育、人権教育にもつながることでしょう。国という単位でのみ文化を比較するのは、「外国は日本と異なる」、「日本の中は同じ文化」という誤概念を植え付けることになるので注意しなければなりません。

多様な文化や習慣、異なる考え方や価値観などを認め、日本や地域の文化も大切にする—そんな豊かな国際感覚をもった子どもたちを育てていければと思っています。

異文化理解教育をする上で、もう一つのポイントは、「ステレオタイプの文化観を育てない」ということです。

「国際理解教育の一環としての英語活動だから」ということもあって、授業の題材として、ハロウィン、クリスマスなどの行事を取り扱った授業が多く見られます。その結果、子どもたちに、英語圏のすべての国でハロウィンやクリスマスがあると思込ませてしまうことがあります。子どもによっては、ハロウィンのお祭りが無いのは日本だけだという誤った概念をもってしまうかもしれません。

このような行事はキリスト教に由来するものが多く、それゆえ、すべての国や地域で同じように行われているわけではありません。例えば、ハロウィンは、同じキリスト教であっても、カトリック、プロテスタントなどの宗派によって、したりしなかったりという違いがあるそうです。

授業で取り扱う場合、子どもたちが、「英語を話す国ではすべてこのような文化なのだ」と外国の文化、英語圏の文化を一くくりにしてとらえてしまうことがないように留意しなければなりません。そのためにも、「英語圏の行事だから」という理由だけで、10月はハロウィン、12月はクリスマスというイベント的な取り扱いは避けた方がよいでしょう。

本書でもそのような行事を題材として取り上げていますが、ハロウィンなどを取り扱う場合には、**ALT**や**外国人ゲスト**に**自分の文化として紹介**してもらうようにしてください。「人を通して」「その人の文化として」行事を紹介してもらうという方法です。

彼らに、「私のうち(地域)ではハロウィンという行事があり、こんなことをしています」という紹介をしてもらうようにします。そして、担任が「世界中すべての国や地域でハロウィンというお祭りが行われているわけではない」ということを伝えます。

ALTや**外国人ゲスト**を「異文化をもたらしてくれる人」として見ますから、彼らが「宗教的な理由で、うちではハロウィンをしない」と言えば、無理して取り扱う必要はないでしょう。世界中には様々な文化や宗教があり、ハロウィンやクリスマスなどの行事も家庭や地域ごとに違っているということに気付かせることは、ステレオタイプの文化観を育てないためにも必要なことです。

また、高学年では単に仮装大会をしたり、クリスマスカードを作ったりするだけでなく、ハロウィンの由来や日米のクリスマスの違いなども紹介するようにします。その際、**ALT**や**外国人ゲスト**に英語で紹介してもらうのか、担任が日本語で説明するのかということについては、クラスの実態に応じて判断してください。歴史的なことや宗教的なことなどのデリケートな内容については、日本語できちんと伝わるようにした方が望ましいと考えます。

表面的に取り扱って、「異文化理解」が「異文化誤解」にならないように留意しなければなりません。

Q5 中学校の英語科とのつながり、いわゆる小中連携はどのように考えればよいでしょうか。

A5 今の時点では、教師同士の情報交換と人事交流から連携を進めるべきだと思います。

次期学習指導要領においても、英語活動(外国語活動)は教科ではなく、領域としての取扱いになるようです。それに対して、中学校外国語科(英語科)は教科ですから、英語活動と外国語科は100%つながるものではありません。松川禮子氏は、「現在の小学校英語活動(外国語活動)と中学校英語教育が連続するものか、否かと問われれば、答えはイエスでもあり、ノーでもあります」と言っています。ですから、連続できる部分は連続していくということが妥協点になるでしょう。

『中教審答申』によると、小中連携に関して次のような記述があります。

小学校段階における外国語活動の導入に当たっては、小学校と中学校とが緊密に連携を図ることが重要である。例えば、中学校においては、小学校における外国語活動の内容や指導の実態等を十分に踏まえた上で、中学校における外国語教育への円滑な移行と、指導内容の一層の充実・改善を図ることが求められる。

さらに、中学校の学習指導要領の改訂を行うに当たり、小学校における外国語活動を通じて培われた一定の素地を踏まえて、中学校における外国語教育では、「聞く」「話す」「読む」「書く」という4技能のバランスのとれた育成がなされるよう見直しを図る必要がある。

これを読むと、小学校に英語活動(外国語活動)が導入されたことを踏まえて、中学校での指導が変わることが求められているように思われます。小学校で中学校英語の前倒しという形でつなげるのではなく、小学校で培われた素地を踏まえて、中学校英語が見直されるべきであるということです。

富田祐一氏は小中連携の6つのステージとして、右のようなことを挙げ、今の時点では、「一貫性」の前に「情報交流」や「人事交流」などから考えることが必要であると言っています。小中学校の教師同士が、お互いの授業を見せ合ったり、中学校英語教師とTTを行ったりするところから始めるとよいでしょう。

また、菅正隆氏は小学校英語活動(外国語活動)と、中・高の英語教育のつながりを右のようなイメージで表しています。

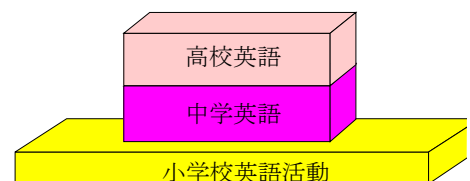
小学校英語活動(外国語活動)は、中学校以降の英語教育を広く浅く支えるもの、すなわち国際コミュニケーションの下地づくりをする段階だということです。英語活動のうちの一部は中学校英語教育につながるが、つながらない部分もあってよいということです。

小中連携の6つのステージ

- 1 目的の一貫性
- 2 教育課程の一貫性
- 3 教授細目の一貫性
- 4 教授法の一貫性
- 5 情報交流
- 6 人事交流

(大東文化大学教授 富田祐一)

小中連携のイメージ



(文部科学省教科調査官 菅正隆)

Q 6 英語活動(外国語活動)の評価はどのようにすればよいでしょうか。

A 6 評価の観点と観点の趣旨を学校内で明確にし、教師ごとに見取りのぶれがないようにすることが大切です。

英語活動では、数値による評価は望ましくないとされていますので、基本的には総合的な学習の時間と同じように、「児童のよい点、学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて評価する」ということとなります。

評価とは、目標が達成できたかどうかという「見取り」をすることです。ですから、まずは英語活動の目標を共通理解しておかなければなりません。そして、その見取りの切り口となるのが「評価の観点」ということとなります。

平成19年度現在では、英語活動(外国語活動)は総合的な学習の時間の一環であり、目標、内容、評価の観点、評価規準などはすべて学校独自に定められていますので、ここでは本研究委員会の試案という形で、提案してみます。

(1) 目標の試案

国際化社会をたくましく生き抜くために、積極的に人とかかわろうとする意欲や態度をもち、コミュニケーション力を身に付けるとともに、言語や文化に対する理解を深めること。

(2) 内容の試案

- ・ コミュニケーションに関すること
言語や文化などが異なる人とも積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲と態度を身に付けるとともに、英語の音や表現に慣れ親しみ、聞き覚えのある表現や視覚的な情報を基に相手の言うことを全体的に把握したり、様々な方法を駆使して反応したりする技能や態度を育てること。
- ・ 文化理解に関すること
自分の身の回りにあるものとは異なる生活・文化・習慣などに触れ、その中に見られる同質性や異質性に気付くとともに、自分と異なる考えや価値観を相対的、客観的に見詰め、差異を認め、それぞれを尊重しようとする意欲や態度を育てること。

(3) 評価の観点と観点の趣旨の試案

評価の観点	観点の趣旨
コミュニケーションや文化に対する関心・意欲・態度	様々な人に積極的にかかわり、相手の言っていることを一生懸命に聞いて何とか理解したり、自分の考えを様々な方法を駆使して何とか伝えたりしようとする。また、自分とは異なる価値観を否定することなく、相手の考えや文化を分かろうとする。

コミュニケーションに対する技能・表現	聞き覚えのある表現やジェスチャー、絵カードなど様々なヒントを手掛かりにして、相手の言っていることのおおよその内容をつかむことができるとともに、それに対して、言語・非言語の方法を駆使して、何とか反応することができる。
言語や文化に対する気付き・理解	自分とは異なる言語や考え、価値観、文化などがあることに気付き、自分と相手のそれぞれの長所・短所を客観的に見詰め、そのよさを理解することができる。

(4) 学年ごとの目標、内容、評価などの試案

3年生	
目標	簡単な英語を使ったコミュニケーション活動を通して、人にかかわる楽しさを味わうとともに、その人がもっている言語や文化に関心を持ち、世界には様々な人が住んでいることに気付く。
内容	コミュニケーション 教師や友達、外国人ゲストなど、様々な人との交流を通して、コミュニケーション活動の楽しさを味わうとともに、相手の気持ちや言っていることを理解しようとする。
内容	文化理解 外国人ゲストとの交流などを通して、日本とは異なるその国独特の生活文化があることに気付き、外国や自分が住んでいる地域を中心とした日本の伝統、文化などに興味・関心をもつ。
観点	関心・意欲 様々な人々に積極的にかかわり、相手の言っていることをしっかり聞いたり、話の内容を理解したりしようとする。 自分が住んでいる地域や外国の生活習慣などに関心を持ち、その特徴を意欲的に知ろうとする。
と 趣	技能・表現 外国人の発話を聞いて、その音をまねしたり、質問などに対して知っている単語やジェスチャーなど様々な方法で反応したりすることができる。
旨	気付き・理 世界には様々な言語があることや、日本語もそれらのひとつの種類であることに気付く。 自分が住んでいる地域の生活習慣の特徴が分かり、他の地域、外国には異なる生活習慣があることに気付く。

4年生	
目標	簡単な英語を使ったコミュニケーション活動を通して、積極的に人にかかわろうとする意欲や態度を育てるとともに、外国の文化に関心を持ち、世界には多くの言語や文化があることに気付く。
内容	コミュニケーション 教師や友達、外国人ゲストなど、様々な人との交流を通して、外見や言語が異なる人々にも積極的にかかわろうとする意欲や態度を持ち、コミュニケーション活動の楽しさを味わうとともに、どのようなことが話されているかを理解しようとする。
内容	文化理解 体験活動や交流活動を通して、異なる文化や日本独特の文化への関心を高め、進んで課題解決をするとともに、日本や外国の文化にそれぞれのよさがあることに気付く。
観点	関心・意欲 様々な人々に積極的にかかわり、相手の気持ちを汲み取ったり、様々な方法で応答したりしようとする。 日本や外国の生活や文化などに関心を持ち、それぞれの特徴についての課題を整理し、進んで調べようとする。
と 趣	技能・表現 外国人の質問や発話を聞き、どんなことが話題になっているかが分かり、知っている単語やジェスチャーなど様々な方法で反応することができる。
旨	気付き・理 世界の様々な言語のうち、多くの国で英語が使われていることが分かる。 外国には様々な生活習慣、伝統、文化があることが分かり、それぞれのよさがあることに気付く。

5年生	
目標	簡単な英語を使ったコミュニケーション活動を楽しみながら、異言語や異文化をもつ人々に積極的にかかわる意欲や態度を育てるとともに、自分の住んでいる地域や世界各地の伝統、文化に興味をもち、それらに対する理解を深める。
内容	コミュニケーション ALTや外国人ゲストとの交流などを通し、コミュニケーションを楽しみ、外見や言語、文化的背景が異なる人に積極的に関わろうとする態度を育てるとともに、どのようなことが話されているのかを考えながら聞き、様々な方法で反応しようとする。
内容	文化理解 様々な活動を通して自国文化や異文化への関心を高め、気付いたことや疑問に思ったことを課題として整理し、主体的に追究しようとするとともに、異なることを受け入れ、それぞれのよい点を認めようとする。
観点	関心・意欲・態度 異なる文化、言語をもつ人々に積極的にかかわり、相手の言っていることを理解したり、知っている単語やジェスチャーなど様々な方法を使って応答したりしようとする。 日本や外国の伝統、文化、言語などに関心をもち、気付いたことや疑問に思ったことなどに関して、主体的に追究しようとするとともに、それぞれのよさを認めようとする。
と 趣	技能・表現 簡単な英語による会話の大まかな内容が分かり、指示に従って作業をしたり、質問や発話に2～3語の英語を使って答えたりすることができる。
旨	気付き・理解 英語が、母語として使われている国だけでなく、多くの国でコミュニケーションの道具となり得ることが分かる。 日本や外国の伝統、文化、言語に見られる相違点、相似点があり、それぞれのよさがあることに気付く。

6年生	
目標	簡単な英語を使って様々な人々と積極的にコミュニケーションを図り、異言語や異文化をもつ人々にかかわろうとする意欲や態度を育てるとともに、異文化や自文化に対する理解とそれぞれを尊重しようとする態度を育て、多面的なものの見方や考え方ができるようにする。
内容	コミュニケーション 言語や文化が異なる様々な人々に主体的にかかわり、英語を媒体としてコミュニケーションを図る楽しさを味わうとともに、どのようなことが話されているのか大まかな内容を理解し、聞き慣れた表現を使って反応することができる。
内容	文化理解 日本や外国の伝統、習慣、歴史などに関心をもち、興味をもった課題について適切な方法を用いて解決するとともに、様々な文化の中に見られる同質性や異質性に気付き、違いを認め、それぞれを尊重しようとする。
観点	関心・意欲・態度 異なる言語や文化をもつ人々に積極的にかかわり、言っていることや気持ち、文化的背景などを進んで理解しようとする。相手の質問や発話に対し、様々な方法で応答しようとする。 日本や外国の伝統、習慣、言語、歴史などに関心をもち、自分の学習課題を主体的に追究するとともに、違いを認め、尊重しようとする。
と 趣	技能・表現 外国人の質問や発話の大まかな内容が分かり、指示に従って作業をしたり、簡単な英語を使って応答したりすることができる。また、英語圏の国に限らず、様々な国のGTと英語を使って交流をすることができる。
旨	気付き・理解 アジアを含めた世界の多くの国の人々と英語を使ってコミュニケーションを図れることに気付く。 日本や外国の伝統、習慣、言語、歴史などの特徴が分かり、学んだことを交流活動や日常生活、各教科の学習などに総合的に生かすことができる。

Q7 指導形態にはどのようなものがありますか。また、それぞれの形態での役割分担や留意点について教えてください。

A7 TTという形態が多いようですが、指導の中心は担任です。

『中教審答申』では、指導者に関して、「学級担任(学校の実情によっては担当教員)を中心に、ALTや英語が堪能な地域人材等とのチーム・ティーチングを基本とすべき」とされています。しかしながら、全クラスの授業でTTを行えるほどのALTを確保することは、財政的にも難しいでしょうから、今後は、担任単独の授業や2人の担任が2クラス合同でTTを組むような授業も増えてくると思われる。

『手引』には、指導形態の工夫として、次のようなパターンが示されています。

- ① HRT+ALT
- ② HRT+ALT+JTE
- ③ HRT+JTE
- ④ HRT+HRT
- ⑤ HRT+GT(VT)
- ⑥ HRT 単独

英語活動に関する略号

HRT … Homeroom Teacher (担任)

ALT … Assistant Language Teacher (外国語指導助手)

JTE … Japanese Teacher of English (日本人英語教師)

GT … Guest Teacher (外部講師)

VT … Volunteer Teacher (ボランティア講師)

TT … Team Teaching (複数教師の指導)

以前は、ALT との TT という形態が一般的でしたが、最近では中学校英語教師が JTE という形で入るケースや、地域人材を GT として迎え、TT を組むというケースなどが増えてきました。

このように、授業を行うに当たっては、様々な形態がありますが、いずれの場合も担任が外れるということはありません。

ところが、小学校現場では、「うちの英語活動は ALT にお任せ」という実態があることもしばしば耳にします。果たして本当にそれでいいのでしょうか？

ALT はあくまでも assistant(助手)であり、担任と一緒に授業をすることが原則の先生なのです。極端に言うと、英語の母語話者というだけで、教員の資格のない人、大学を出たての人など様々です。その人たちに、授業の計画から実施までのすべてを任せてしてしまうのは教師の責任を放棄したことと同じです。

例えば、ピアノが上手に弾ける大学生に音楽の授業を、美術専攻の学生に図工の授業を1人でしてくださいとお願いするでしょうか。彼らを GT として迎え、持ち味を引き出しながら音楽や図工の授業をすることはあるでしょうが、単独で授業を、それも年間10時間などのまとまった時数をお任せにすることはあり得ません。

児童の実態をよく知っている担任が計画を立て、ALT や GT を文字どおりアシスタントやゲストとして迎え、授業を進めることが重要になってきます。



GT とのチーム・ティーチング

Q 8 授業中は“All English”で指導をすべきでしょうか。

A 8 指導者の英語力に応じた英語での投げ掛けをすればよいでしょう。

英語活動のねらいの1つが、「相手の言っていることを一生懸命に聞き、言語メッセージだけではなく、非言語メッセージまで含めてキャッチし、様々な方法を使って何とか気持ちを伝えようとする」とすれば、ALT や外国人ゲストはできるだけ日本語を使わず、子どもたちには英語で話し掛けるべきでしょう。自分が言っていることが子どもたちに伝わっていないと感じれば、指導者側が前に述べた「方略的能力」を駆使して、子どもたちが分かるようなメッセージの投げ掛け方を工夫すべきです。

子どもたちが分かっていないようだからと言って、ALT の英語を日本語に訳してしまう教師もいるようですが、『手引』の中にも、「ALT とのティーム・ティーチングでは、ALT の英語を逐一日本語で解説したり、訳したりすることは、不必要であり、避けるべきである」と書かれています。担任の先生が日本語で説明してくれると子どもたちが思い込めば、ALT が言っていることを一生懸命に聞く必要がなくなり、子どもたちは初めから担任の顔を見るようになってしまいます。

ところが、担任だけの授業、あるいは担任同士での TT の場合には、少し状況が異なってきます。

もともと英語力というものを求められずに教師になった小学校担任に、英語活動が始まったからと言って“All English”で授業をするように求めるのは酷でしょう。そのことで、担任自体が「英語嫌い」になってしまっただけでは本末転倒です。

それぞれの教師の英語力には当然個人差があります。ですから、その先生がもっている英語力の中で、できる限り英語を使うように努力するというだけでいいと思います。

具体的には、その日の授業のテーマにかかわる表現を拾い出し、「今日はこの表現で子どもたちに語り掛けよう」ということを意識します。

例えば、「数」をテーマにし、数字や数を尋ねたり答えたりという表現を使ってコミュニケーションを楽しむ活動を計画したとします。1～50の英語での言い方と、“How many ○○ are there in ~?”や“**How many ○○ do you have?**”という表現を子どもたちに繰り返し投げ掛けるように努力するのです。このような基本表現は、子どもたちが言えるようになることを目標としたものではなく、教師が繰り返して使うことで自然にインプットさせるものとしてとらえます。

同じような表現の一部を入れ替えるだけでも、子どもたちにとってはたくさんの英語が投げ掛けられたと感じられることでしょう。

また、クイズを出題する場合は、英語での問題やヒントをあらかじめ書いておいて、それを**読みながら出題する**ということでも問題ありません。日本語でのクイズを読みながら出題するということと同じです。

いずれにしても、初めは英語を話すということに戸惑ったり、気恥ずかしさを感じたりするかもしれませんが、次第に慣れと自信が生まれることでしょう。

「英語を教える」というのは難しいかもしれませんが、英語活動は「英語を教える」時間ではありません。「**英語によるコミュニケーションを楽しむ**」時間です。メッセージ性を重視し、英語で語り掛けるつもりでできるところから始めてみましょう。

Q 9 自分の英語に自信がないのですが、担任が中心となってよいのでしょうか。

A 9 文法や発音の正しさよりも、言葉に乗せたメッセージが届くことを重視してください。

子どもたちに投げ掛ける英語は文法的にも発音も正しいに越したことはありません。しかし、正確さを気にするあまり、小学校教師が英語活動に対してやる気を失ったり、授業に消極的になったりするようではいけません。まずは、教師自身が英語活動を楽しむためにも、正確さを求め過ぎない方がいいでしょう。

英語活動で目指していることは、正しい文法や発音を身に付けさせることよりも、教師と子ども、あるいは子ども同士でメッセージのやり取りを楽しませることです。ですから、少々間違いがあったとしても、子どもがそれをキャッチし、何からの反応を返してくれるというプロセスを大事にしましょう。

英語を苦手としている教師の方が、前にも述べた何とかして伝えるという「方略的能力」を駆使して英語を使う傾向があります。

例えば、5人グループを作らせるときに、"Please make groups of five."という英語の指示をします。しかし、英語が苦手な教師が、子どもたちを順に指さしながら、"One, two, three, four, five. Sit down."という指示を出せば、そちらの方がかえってよく意味が伝わるということもあるわけです。

ALT とのやり取りにおいても、担任が片言の英語で身振り手振り、あるいは日本語を交えながらでも一生懸命にコミュニケーションを取る姿を見せることは、子どもたちにとってもプラスになります。

子どもたちに、言語はうまく操れなくとも、人と人とが仲良くなるにはどのような姿勢が大事なのかを見せることは、「コミュニケーションモデル」としての担任の役割を果たしていることになります。「英語が上手じゃなくても、相手は分かるようになってくれるんだ、分かってくれるんだ」ということを身をもって示し、子どもたちのコミュニケーションへの意欲をかき立てることでしょう。

また、担任がジェスチャーを交えたり、絵をかいたりしながらコミュニケーションを取っている姿を見て、子どもたちも同じように非言語メッセージを駆使して相手にかかわるという手段を知らず知らずのうちに学ぶということも言えます。

そのような姿は、英語が得意でないからこそ自然に見せられるものだと思います。

発音については、正しい・間違いということよりも、相手に伝わるかどうかというレベルで考える必要があります。吉田研作氏は、それを"acceptability"という言葉で表しています。相手に受け入れ(accept)ができること(ability)が重要というわけです。

また、"World Englishes"という言葉もあります。"Englishes"というのは英語の複数形であり、世界中には様々な表現や発音をもつ英語があるが、それがコミュニケーションの道具として使われる限りは認めようという考え方です。

小学校教師が初めからカタカナ英語でいいと開き直って、英語力向上をあきらめてしまっただけではいけません。努力した結果の今の英語力で自信をもって語り掛ければ、それで十分だと思われれます。

Q10 小学校担任が心掛けること、できることにはどんなことがありますか？

A10 A9で述べた「コミュニケーションモデル」の他に、学習者のモデルとしての姿を見せることです。

小学校担任には、英語が得意でなくとも、一生懸命にコミュニケーションを取っている姿を見せる、つまり「コミュニケーションモデル」としての役割があるというのはA9に書いたとおりです。

担任のもう一つの役割として、「学習者モデル」ということが挙げられます。

子どもが校庭でカマキリを捕まえて来て、「マイケル先生にカマキリを見せてあげたい。カマキリって英語でなんて言うの？」こう尋ねてきました。"mantis"という英単語を知っていれば別ですが、それが分からなかったときにどう対応されるのでしょうか？多くの先生方が、「先生も知らないから、これをマイケル先生に見せて、何て言うのか聞いてみよう」とか、「辞書で調べてみようか」といった対応を取ると思います。

教師と言えども万能ではありません。特に、英語に関しては、「先生も勉強中だから」という姿勢でいいのではないのでしょうか。分からないときや困ったときにそれをどうやって解決するのか、大きく言えば問題解決をしていく過程を見せるという「学習者としてのモデル」になることが求められています。

授業を計画する段階でも担任の持ち味を発揮することができます。

小学校でも一部教科担任制を取り入れている学校がありますが、多くの学校で基本的にはすべての教科を担当が指導するという事になっています。

そのときに、他教科の内容を取り入れた活動を計画できるのも小学校担任ならではの長です。後の実践事例にもそのような活動がたくさん出ています。

その際は、下学年で既に学習したこと、あるいはほとんどの子どもが内容を理解できることを英語活動にアレンジするということが必要になってきます。例えば、高学年で日本地図を利用して川の長さ、山の高さを取り扱ったり(43ページ参照)、校区内の地図や地図記号を使ったやり取りをしたり(75ページ参照)できます。また、一部の算数の教科書では、発展学習的な取り扱いで、時差やタングラムが出ていますが、それを英語活動で取り扱うこともできます(50, 51ページ参照)。

他教科の内容を英語で指導するという「イマージョン」という手法がありますが、公立小学校の英語活動ではあまりお勧めできません。教科の内容を理解することに加えて、英語での説明を理解するという二重の負担を子どもたちに強いることになるからです。各教科の指導においては、まずはその内容をきちんと日本語で指導するということが優先されるべきでしょう。



時差を題材にした授業

Q11 高学年の児童に合った活動を計画するときのポイントは何ですか。

A11 中学年は歌やゲーム、クイズなど、高学年ではそれに知的好奇心を刺激するような活動を組み入れることがポイントです。

英語活動に何年か取り組んだ先生から、「高学年の授業が難しい」という話をしばしば聞きます。低～中学年ぐらいまでは歌やゲームにも楽しそうに取り組んできた子どもたちが、高学年になるとあまり楽しそうな表情をしないということです。

トム・マーナー氏は、低・中学年児童と高学年児童の特徴を次のように説明しています。

低学年・中学年児童の特徴

- ・ 大きな声を出したり，ジェスチャーを付けて歌ったりすることへの抵抗が小さい。
- ・ 失敗してもあまり気にしない。
- ・ 単純なルールのゲームや繰り返しも楽しむ。
- ・ バーチャルな場面設定に入って楽しむ。



高学年児童の特徴

- ・ 大きな声を出して英語を言うことや，ジェスチャーを付けて歌うことなどに抵抗がある。
- ・ 目立つことや間違うことを気にする。
- ・ 知的好奇心を刺激されると興味をもつ。
- ・ 活動に意義や目的を求める。
- ・ 本物，現実を好む。

英語活動の計画をする際も，このような心の発達段階を考えていくことが必要です。

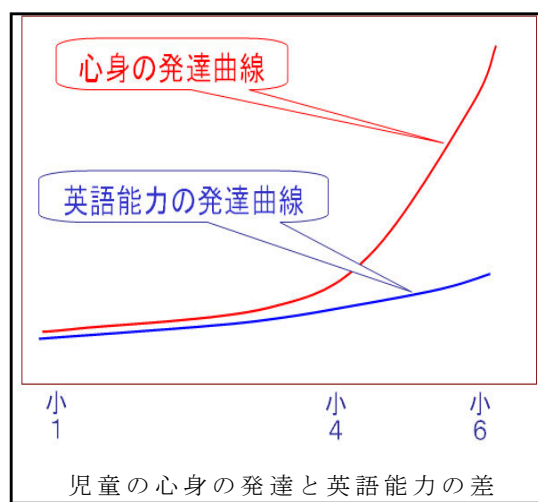
中学年段階までは，歌やゲーム，クイズなどを中心に英単語に触れさせたり，英語のリズムを楽しませたりすることができます。その際には，教室を動き回り，体全体で表現させるような活動を計画します。

それに対して，高学年になると，単に英語をリピートさせるだけの活動や体を使って表現するような活動に抵抗を示すようになります。

小泉清裕氏は，右のようなグラフを示して，高学年児童の発達段階と英語力の差に対応した指導が必要であると述べています。

3年生ぐらいから週に1時間の英語活動を行ったとしても，英語のインプット量は少なく，英語の能力というものはそこまで伸びるとは期待できません。高学年になったからと言って，子どもたちが触れる英語の内容を難しくしたとしても，英語嫌いを増やすだけになる場合が多いようです。

このような発達段階に対応すると，単に歌ったり踊ったり，あるいは勝ち負けを競うだけのゲームをしたりという



ことよりも、活動の中に「へえ～」という驚きや新鮮な気付き、目的のある英語表現などを仕組む必要があります。

そのポイントを2つほど示してみます。

(1) ポイントその1…指示を聞いて作業をするというタスク(課題)を仕組む

「英語をやっているからには最終的に英語を話せるようにしなければいけない」という思いからか、ごっこ遊びに見られるように、決まった表現を覚えさせ、順番に言わせるというような活動がしばしば見られます。しかし、覚えたことを言うだけの行為は「オウム返し」という言葉もあるように、本当の意味でのコミュニケーションとは言えないものもあります。また、単語や表現を覚える、さらに、覚えたことを言わなければならないということに抵抗を示し、「英語活動が楽しくない」という子どももいることでしょう。

自分の意思を英語で表現できるほどインプット量が十分でない小学校段階では、「英語の指示通りに体を動かすことができる」、「英語の質問にジェスチャーなどで意思表示ができる」、「英語による説明で作業ができる」といった活動を計画してはどうでしょうか。

英語の指導法の一つに、TPR (Total Physical Response=全身反応法) というものがあります。

例えば、"Stand up." とか "It's very hot today. Please open the window."と言われたときに、その意味が分かって、立ったり窓を開けたりといった動作ができることから始め、その後に発話を目指すというものです。この考えを参考にすれば、インプット量が十分でない小学校段階では、「英語の指示に従って作業をする、何かを作る」というタスク(課題)を設定し、英語が分かったという結果として作業ができた、何かが作られたというものが見られるという考え方を取り入れることが望ましいと思われます。

特に、「自信のないことは言えない」という傾向が見られる高学年の子どもたちにとっては、無理に発話しなければならないという心理的な負担も小さくなるという点で有効です。

大人は、英語という言語を使った授業の結果として、「発話」を求める場合が多いのですが、コミュニケーションの場面では、「受信」と「発話」の双方があり、子どもたちの英語力を考慮した場合には、まず「受信力」、特に「類推により何となく分かる」という力を大切にすべきでしょう。

英語で考えや気持ちを表現できるという前に、英語を聞いて分かったという自信をもたせることが重要になってきます。

子どもたちが興味をもちそうな作業を授業に取り入れ、その指示を英語ですることで、「英語を聞く」という必然性が出てきますし、指示どおりに作業ができたということは、コミュニケーションが成立したと言えるわけです。A2でも述べたとおり、言葉による反応だけがコミュニケーションではありません。コミュニケーションを広い意味でとらえることが重要です。

さらに、子どもたちが興味をもちそうな作業を考えるとき、図工や音楽、家庭などの内容からヒントを得ることができるというのも小学校教師ならではの強みです。言語の習得だけを目指しているわけではありませんから、合科的なカリキュラムを組んで小学校段階にふさわしい英語活動を構築してみましょう。



指示に従ってポップコーンを作る

(2) ポイントその2…コンテンツ(内容)を盛り込む

もう一つの視点は、英語活動に高学年児童の知的好奇心を刺激するような内容を盛り込むということです。

英語活動は「国際理解教育の一環」という位置付けで行われますので、英会話だけに焦点を当てるのではなく、他教科で取り扱った内容などを盛り込む必要があります。

英語活動のねらいの一つに「異文化・自文化に気付き、それぞれのよさを認める」ということがあります。活動の中に、異文化や自文化に気付くような内容、児童の知的好奇心を刺激するような内容をリンクさせることで、子どもたちの意欲を高めることができます。

(2)で説明したタスク活動では、図工、音楽、家庭などの技能教科で取り扱う作業を取り入れることが多いのに対して、コンテンツ重視の活動は、国語、社会、算数、理科学的な内容と関連付けることが多いようです。

後の活動実践事例で紹介しているように、インチという単位(41ページ参照)、世界の主な都市と時差(42ページ参照)、三原色を使った色づくり(54ページ参照)、動物の漢字表記(71ページ参照)など、「へえー」と感心させるような内容を盛り込むことが考えられます。

また、ただ単に野菜や果物の名前を取り扱うのではなく、その植物のどの部分(実・花・茎・根など)を食べているのかということなどと関連付ける(60ページ参照)、世界の国や都市名とそれぞれの地域の代表的な食べ物と関連付ける(63ページ参照)、動物をそのエサとなる食べ物や住んでいる地域と関連付ける(70ページ参照)など、小学校教師のアイデアで英語活動に広がりをもたせることができます。

授業の終わりに文化的な側面からまとめをするというような場面では、日本語の説明が多くなることもあります。「言語や文化に対する理解を深める」というねらいを達成するためには、日本語を効果的に使った方がよい場合もあると思われます。「国際理解活動の一環として」という現在の位置付け、あるいは「担任が中心として」という指導体制を考えると、オールイングリッシュの授業である必要はありません。

ほとんどの教科を担当が指導するという小学校担任の持ち味を発揮し、他教科の内容をうまく取り入れた指導計画を立ててみてください。そして、子どもたちの興味を引きながら、知らず知らずのうちに英語に耳を傾けさせるような工夫をしていきましょう。



How many inches is it?



Let's make a time disk!



What color can you see?



Please paint the face green.

Q12 年間計画における系統性はどのように考えればよいでしょうか。

A12 英語の系統性よりも活動の系統性を重視すべきです。

「年間計画」ということを考えたときに、「その系統性は？」ということがよく話題になります。その場合、多くの先生方が、「英単語や英語表現の系統性」、あるいは「文法事項の系統性」ということをイメージしておられるのではないのでしょうか。

中学校の英語科では、単語や文法にある程度の系統性があると言えます。例えば、be 動詞の後に一般動詞が出てくるとか、現在形から現在進行形、過去形へと学習が進むというようなことです。

しかし、英語活動では単語や文法の習得ということを第一のねらいとしていませんので、必ずしも現在形から過去形へとか、簡単な単語から難しい(あるいは長い)単語へという系統性が必要なわけではありません。言葉に込めたメッセージ性が伝わるような場面設定の中で、過去形の英語表現で子どもたちに語り掛けることもありますし、非言語メッセージによるヒントを与えることで square(正方形), rectangle(長方形), oval(楕円形)など中学校で出てこない単語を使った活動をする場合もあります。

また、英単語や表現での系統性ということ意識しすぎると3年生、4年生…と学年が上がるにつれて、抽象的な語いや難しい表現、長い文章を取り扱うようになり、その結果、子どもたちへの負荷が大きくなって、ひいては英語嫌いを増やす結果になる場合もあります。

『手引』では、指導上の留意点として「無理に覚えさせない」ということが挙げられています。活動の中ではコミュニケーションを楽しむ、メッセージのやり取りを意識するということが重要ですから、触れた英単語や英語表現は**忘れてしまうことを前提**に取り扱うべきでしょう。したがって、英単語や英語表現は、学年が上がったとしても無理にレベルを上げることなく、様々な活動の中で繰り返し触れるようにしていくことが重要です。

それでは、3年生から4・5・6年生と学年が上がるにつれて、同じような活動を繰り返ししていけばいいかと言えば、そうではありません。小学校段階では一学年違えば、体格も精神年齢も大きく異なると言われていますので、6年生が3年生と同じような活動を楽しめるということは難しいでしょう。そこで、A11でも述べたように、**言語材料や英語表現を難しくするのではなくは、活動の内容のレベルを上げていく**ということが必要になってきます。

例えば、数をテーマにした活動でも、中学年では「ビンゴゲーム」や「オオカミさん今何時」などのゲームの中でコミュニケーション活動をさせますが、高学年では同じような表現を使って、インチという単位や時差の概念などを織り交ぜながらコミュニケーション活動を楽しませるということです。

学年が上がるにつれて、英単語の数が増えたり表現が長くなったりということは多少はあるでしょうが、基本的には英語を難しくするのではなく、「活動の中身」を難しくするということがポイントになります。

第2章の実践例では、この考え方にに基づき、同じテーマで活動のレベルを上げるというユニットを組み、その並び方を工夫することで年間計画ができるようなプランを提示しています。あとは、他教科での学習内容との関連を考えながらユニットの並び替えをすればよいでしょう。また、バルーンフェスタ、渦リンピックなど、地域の行事を教材化して年間計画に組み入れるような工夫もしてください。

Q13 小学校では文字(アルファベット)は取り扱ってはいけないのでしょうか。また、子どもたちが、アルファベットやカタカナで書いてくださいと言ったときには、どうすればよいのでしょうか。

A13 基本的には音声中心のやり取りを楽しませることになります。しかし、アルファベットを遮断しなければならないということではありません。

『手引』では、「活動の在り方」の項目で、次のように述べられています。

コミュニケーションは、主に音声と文字を媒介として行われる。しかし、英語の文字と音声を同時に媒介として意思の伝達を図ろうとすることは、小学校の子どもにとっては、負担が大きすぎて、英語嫌いを生み出すことになる。

小学校において子どもが英語に慣れ親しんでいく過程を観察してみると、英語の音声だけで十分にコミュニケーションを図ることができると言える。さらに、英語の音声による言葉だけでなく身振り手振りや表情などによっても、意思を伝達できるものである。

このようなことから、小学校の英語活動においては、身近で簡単な英語を聞いたり、話したりする活動を中心に行っていくことになる。

したがって、小学校段階では原則として文字は取り扱わないということになります。

授業の中では、アルファベットとその発音の結び付きを覚えさせるフォニックスという指導が取り入れられているものが見受けられますが、小学校段階の活動としては適当ではないでしょう。

しかしながら、文字は取り扱わないということは、アルファベットなどを見せてはいけないということでもありません。

例えば、リンゴの絵カードの下に"an apple"という文字が入っていることで、子どもたちは「リンゴ」という日本語ではなく、英語でイメージしようとする傾向が見られるようになります。

また、英語活動を行う教室として、"English room"が設けられているような場合には、そこにアルファベットを含めた掲示物を貼り、英語活動の雰囲気盛り上げるということもあるでしょう。

高学年では、「英語を書きたい」という気持ちから、授業の中で文字指導を求める場合があります。それらのことが、英語塾や英会話教室に通っている一部の子どもたちの要求である場合は、個別に対応し、授業の中で一斉に取り扱うことは避けた方がよいでしょう。

また、子どもたちから、「先生、英語(またはカタカナ)で書いてください」という要求が多いとすれば、授業の中で、「英文を覚えて言わなければならない」という活動が多くないかということを振り返ってください。そのような場合には、「英語を覚えて言わせる」という教師の授業スタイルを少し見直す必要があるでしょう。

子どもたちの、「英語を言えるようになりたい」という積極的な気持ちから、「カタカナで書いてください」と要求されたら、「ALT の〇〇先生に言ってもらうから、自分が聞こえたとおりに書いてごらん」と、自分の記号として書かせるところが妥協点だと思われれます。

Q14 その他、ちょっとした指導のポイントやコツを教えてください。

A14 次のようなことに留意して指導してはどうでしょうか。

① 子どもたちに質問を投げ掛けた後は、答えてほしいことをいくつか並べて、質問の意味をつかませます。

意味のある場面設定の中では、子どもたちに場面に応じた質問をたくさん投げ掛けることがあります。その際、質問の意味を日本語で説明するのではなく、やり取りの中で何となくつかませるような工夫が必要になります。

その一つのコツとして、質問に対する答えになるものをいくつか提示するというものがあります。

(例1) 新しいALTを紹介する中で、ALTのことについて子どもたちに推測させる場合

"His name is Patrick. Where is he from? Is he from America? Is he from Canada? Is he from Australia?"

"Where is he from?"という質問は分からなくても、その後で"Is he from America? Is he from Canada? Is he from Australia?"と尋ねることで、出身国を尋ねられているということが何となく伝わります。この場合、世界地図を掛けておいて、その国を指しながら質問すれば、より分かりやすくなります。

(例2) 勝ち負けを競うゲームをした後で何点取ったかを尋ねる場合

"How many points did you get? One point? Two points? Three points?"

点数を聞いたあとで、指で数字を示しながら、"One point? Two points? Three points?"と尋ねることにより、点数を聞いているのだということが子どもたちに伝わります。

(例3) 単にイエスかノーかを答えるような質問をした場合

"Do you play basketball? Yes? No?"

"Yes? No?"と尋ねることで、"Yes / No question"であることが伝わります。

② 言えるようになるために発音するのではなく、聞き分けるために発音するという視点で繰り返しの口頭練習をさせます。

授業の中で単語や文を繰り返し練習させるという場面をしばしば見掛けます。その練習は、単語やセンテンスが言えるようになるという目標で行われる場合が多いようです。そうしたときに、教師はつい「この前練習したのにもう忘れたの?」「あれだけ練習してもまだ言えるようにならないの?」と子どもに「覚える」という成果を求めてしまうことも少なくありません。その結果、覚えられないことで英語嫌いになる子どもたちもいるようです。

ここは発想の転換をして、「覚えて言えるようになるために練習する」ということから、「英語の音

を聞き分けるようになるために練習する」というふうに考えてはどうでしょうか。

「人間は、聞こえた音を実際に自分が口にするので、その音を聞き分けられるようになる」ということが言えます。分かりやすく言うと、「ふだんの生活であまり聞き覚えのない音、例えば、"vollyball" という音をまねして口に出すことで、次にその音が聞こえてきたときに『バレーボールのことだ』と聞き分けることができる」ということです。ALT の発音をまねさせることで、その音を聞いて認識できるという力が付くと考えられるのです。

そうすれば、子どもたちに過度の負担を強いることも少なくなるのではないのでしょうか。

また、センテンスに関してはパンプラクティスという練習が取り入れられることがあります。

パンプラクティスにはいくつかの練習がありますが、基本文型の一部を入れ替えて練習する方法が、"Substitution Drill" (入れ替え練習) と呼ばれるものです。

この練習方法は、繰り返し練習することで、子どもたちが英語を話しているように見えますが、「文脈や場面と切り離れた練習になることが多く、実生活の場で学習の効果を発揮する確率は小さい」、「機械的な練習になるため、一見活気のある授業に見えるが、精神年齢が高くなれば次第に退屈に感じるようになる」などの問題点もあります。

パンプラクティスには、長所もあり、小学校の英語活動で全否定されるわけではありませんが、たくさん練習させて口から英語が出るようになりさえすれば英会話をしている、英語でコミュニケーションを取っているという見方はしない方がいいでしょう。

③ 担任だけで授業をする場合は、視聴覚教材を効果的に活用します。

担任だけで英語活動を行う場合には、担任の英語力を補うものとして、視聴覚教材を利用することが効果的です。

例えば、NHK 学校放送番組として3年生対象の「えいごリアン3」、4年生対象の「えいごリアン4」、高学年対象の「スーパーえいごリアン」などの番組が放送されています。対象学年はあくまでも目安ですから、学級の実態に応じて、他の学年で視聴させることもできます。平成20年度以降にも同じように放送されるかどうかは未定ですが、このような番組については、ビデオやDVDのセットとして販売されていますので、学校で購入しておくといよいでしょう。

これらの番組を見せた後で、番組中に出てきた活動と同じことをさせるということが考えられます。

例えば、スーパーえいごリアンの「ポップコーンを作ろう」という回を見せて、同じように英語の指示でポップコーンを作らせるというような活動を行ったことがあります。

それぞれの番組ホームページには、番組を利用した英語活動の指導例が見られる「先生のページ」があります。番組と連動したホームページを効果的に活用することで、授業のアイデアも広がることでしょう。

多くの出版社や教材会社等から様々な視聴覚教材が販売されていますが、中には英単語や英語表現を繰り返し練習させるような内容になっているものもあるようです。教材を選択する教師側が英語活動のねらいをしっかりと意識し、取捨選択することが必要になってきます。



④ 担任が、子どもの立場に立った質問をALTに投げ掛けることで、子どもの理解を助けたり、尋ねやすい雰囲気をつくったりすることができます。

ALT(GT)とのTTを行う際に、担任は子どもたちの表情を見ながら、コミュニケーションが成立しているかどうかということ把握しなければなりません。ALTの英語が分からないときに、子どもたち自身が「分からない」というメッセージを伝えられるようになることが必要ですが、担任も子どもたちの理解を助ける工夫をしなければなりません。

その一つの方法が、「子どもの代わりにALTに質問する」ということです。

実際の授業の中で、次のような場面がありました。

「イメージーションビンゴ」という、ある言葉から連想する言葉を使ったビンゴゲームをしていたときのことです。ALTが「夏」という言葉から連想するものとして"Fireworks.(花火)"という言葉を行いました。子どもたちは、"fire(火)"という言葉は何となく分かったようですが、それと花火が結び付いていないようだということが表情からうかがえました。しかし、ALTは子どもたちが理解していると受け取ったようで、次の言葉に進みそうな気配が感じられ、子どもたちも質問するタイミングを逃してしまいそうです。そんなときに、担任が子どもたちの立場に立って、



自分自身が分からないという振りをして"What's fireworks?"(「fireworksって何のこと?」)と尋ねました。そうすると、ALTも身振り手振りを交えたり花火の音をまねしたりして、花火であるということを伝えてくれました。

このように、子どもたちにとって聞き慣れない言葉などが出てきたところで、"What's that?"(それなんのこと?)と担任が尋ねることにより、子どもたちには「分からないことは遠慮なく質問していいんだ」というメッセージを伝えることができます。また、ALTも、そこで身振り手振りを交えたり、絵を描いたりして何とか伝えようと努力をしてくれます。それと同時に、ALTに「今の英語が子どもたちには理解できていない」ということを伝えられるのです。

子どもたちのことをよく理解している担任だからこそできることだと思います。

⑤ 英語だけではなく、できる限り視覚的な情報を交えるようにします。

A2で述べたように、「コミュニケーションにおいては、視覚的な情報の果たす役割が大きい」ので、できるだけ英語と同時に視覚的な情報を投げ掛けるように心掛けましょう。

視覚的な情報の代表的なものとしては、絵カード、写真、ジェスチャーなどがあります。

普通名詞で絵や写真に表すことができるものは、カードで提示したり、パソコンを利用してプロジェクタで大きくして見せたりします。

適当な写真を探す場合には、インターネットを利用するとよいでしょう。例えば、グーグルという検索エンジンのトップページ



絵カードを使って

には、「画像」というアイコンがあります。そこをクリックして、欲しい画像のキーワードを入れると、その言葉に関係するイラストや写真がたくさん出てきますので、必要な画像を保存して使います。画像によっては縮小されている場合や著作権で保護されているものもありますので、注意してください。それぞれの画像をクリックすると、画像の元ページに飛ぶことができますので、そこで確認しましょう。

また、ALT や担任が英語で話す場合は、なるべくジェスチャーを交えるようにします。例えば、長さの異なる2本のひもを見せながら、"Which is longer?"と尋ねるとき、手を横に広げながら"longer"と言うだけで、子どもたちには尋ねていることが何となく伝わります。

できる限り視覚的な情報を同時に提示することで、子どもたちは、理解するためには耳で聞くだけでなく、見ることも有効であると気付くことでしょう。その繰り返しで、相手を見ながら話を聞くという好ましい姿勢にもつながることだと思われます。

絵本を利用するときは、読んだだけで終わらないようにします。

子どもたちは絵本の読み聞かせが大好きです。ALT や担任が表情豊かに読んでやると、その表情と絵から絵本の中に引き込まれていくのが分かります。

大きいサイズの絵本がない場合は、絵カードと同じように、スキャナで読み取ってパソコンに取り込み、プレゼンテーションソフトにはり付けて、プロジェクタで大きく提示するとよいでしょう。

絵本を読み聞かせをするときには、1回読んだ後で、その中身について簡単な英語で質問をします。

例えば、"Brown Bear, Brown Bear, What do you see?"という絵本がありますが、その本を読んだ後で、"What color was the dog? Black? White?..."と尋ねるのです。そうすれば、そこまで注意深く聞いていなかった子どもたちからは、「覚えていないよ～。もう1回読んでください」というリクエストが返ってきます。2回目は更に注意深く絵を見ながら、教師の英語を聞くようになることでしょう。

そして、2回目を読んだ後で、今度は更に小さいところについて質問するのです。"What color were the cat's eyes?"という感じです。そのようなやり取りをしながら、飽きさせることなく繰り返し本を読み聞かせすることができますし、教師と子どもたちで意味のあるやり取りを行うことができます。

また、何回か読んでいくうちに、"~, what do you see?"といった繰り返しの部分を一緒につぶやく子や、"I see a"とちょっと間を置いて読むと、"Yellow duck!"や"Blue horse!"などそのページを予想した言葉を言う子などが見られるようになります。子どもたちが知らず知らずのうちに、英語でのやり取りをしている様子がうかがえます。

さらに、"Brown Bear, Brown Bear, What do you see?"の絵本を使った実践では、読み聞かせをしながら、自分の好きな動物や色を使って絵を描き、オリジナル絵本を作るというものがあります。

自分たちでオリジナルの絵本を作り、それをALTに読んでもらうことで、子どもたちは自分の好きな動物や色を尋ねたり答えたりするというコミュニケーション活動を楽しむことができます。



絵本の読み聞かせ